論　文

現代ギリシア語との対照による アルバニア語の前置詞 **në, mbi, te** の機能の研究

井浦　伊知郎

0.序

アルバニア語の前置詞 në[1], mbi, teは、空間内に於ける対象物と基準点（面）の位置関係を示す。本稿では、この３種類の前置詞が示す空間内の位置関係を比較し、その差異を考察する。その際、現代ギリシア語に於ける前置詞σε, από の空間指示機能との対照を参考として分析する。

1.「内部」のnëと「上方」の mbi

nëには、例(01)の様に物体が静止した、或いは（移動の結果として）既にそこにある「場所（place）」を示す場合と、例(02)の様に物体がそこに向かって移動していく「着点（goal）」を示す場合とがある[2]。

(01)*Banoj　　<u>në</u> Tiranë.*

live-sg.1　　Tirana-acc.indef.

「私はTirana<u>に</u>住んでいる」（場所）

(02)*Shkoj　<u>në</u> Tiranë.*[3]

go-sg.1

「私はTirana<u>へ</u>行く」（着点）

以下、本稿では「場所」の表示機能に重点を置いて考えを進めることにする。「場所」の用法について、現代ギリシア語の前置詞σεを用いた表現を示すと(03)の様になる。対照の為、アルバニア語の例(04)を併記する。

(03)*Είμαι <u>στο</u> σπίτι.*

(04)*Jam　　<u>në</u> shtëpi.*

be-sg.1　　house-sg.acc.indef.

「私は家<u>に</u>いる」

ところでこうした内容の場合、「私」は「家」とどの様な位置関係にある

のだろうか。アルバニア語の場合について言えば、話し手は家の「内部」にいる（玄関や庭先でなく）と聞き手が判断する可能性が高い。

σεを用いた次の例(05)では、「本」が「机」の上に置かれている可能性もあるし、引き出しの中にしまってある場合も考えられる。

(05)Υπάρχει ένα βιβλίο στο τραπέζι.

「テーブルの上に本がある」または「テーブルの中に本がある」

ところが例文(03)と(04)に見られるσεとnëのパラレルな対応を念頭に置いて例文(05)の内容をアルバニア語で書くと、その意味する位置関係はずれてくる。

(06)*Ka* *një libër* *në tryezë.*

have-sg.3 one book-sg.acc.indef. desk-sg.acc.indef.

「机の中に本がある」[4]

?「机の上に本がある」

「本」が「机」の面の上に存在する（密着して置かれている）場合に、nëを使うと不自然である（少なくとも机のどこにあるかということは曖昧になる）[5]。

「机の上（上面）」を表す場合は、例(07)の様に前置詞 mbiを用いる方が適切である。

(07)*Libri është mbi tryezë.*

「机の上に本がある」

さて、対象物「本」は、テーブルの上に密着して置かれているのが普通であるが、それでは、もし対象物が机やテーブルから浮いて存在する様なものであるとすれば、どの様に表現されるだろうか。現代ギリシア語では、副詞と前置詞を組み合わせた複合前置詞を頻用する。次の２組の例文は副詞πάνωの「上に」を伴う前置詞σεと απόの例である。

(08)Υπάρχει ένα βιβλίο πάνω στο τραπέζι.

「机の上に本が（置いて）ある」

(09)Υπάρχει μια λάμπα πάνω από το τραπέζι.

=(09')Μια λάμπα κρέμεται πάνω από το τραπέζι.

「机の上方にランプが（ぶらさがって）ある」

例(09)の様に απόが使われると、対象物が位置の基準点から離れて存在し

ているものと理解される（Mackridge 1985　及び　橘 1994）。

次にその例(09)をアルバニア語の文に書き換える場合は、２通りの例が考えられる。例(10)は複合前置詞（アルバニア語でも副詞と前置詞の併用は日常的である（Buchholz & Fiedler 1987）。ただし本稿では繁雑を避ける為基本的に単純前置詞を対象として扱う）、(11)は単純前置詞を用いたものである。

(10)*Llamba　　është për<u>mbi</u> / lart　　<u>mbi</u> tryezë.*
　lamp-sg.nom.def.　　upwards
=(10')*Llamba varet　　<u>mbi</u> tryezë.*
　　hang-pas.sg.3
「机<u>の上方に</u>ランプが（ぶらさがって）ある」
(11)*Llamba është mbi tryezë.*
「机<u>の上に</u>ランプが（ぶらさがって／置いて）ある」

厳密に言えば、ランプが確実に机から離れているのは例文(10)の方で、例(11)の場合は「ランプが机の上に置かれている」可能性もある。もし mbiのみの使用で「机の上面に接している」ことを明確に示すなら、次の様に動詞を変えざるを得ない。

(12)*Llamba vihet　　<u>mbi</u> tryezë.*
　　lay-pas.sg.3
「机<u>の上に</u>ランプが置かれている」

既に述べた様に例(11)の解釈は文脈に依存して両義的である。しかし同じ mbiを用いても、普通の文脈なら例(07)では本が机の面に接触していると考えられる。

一方、次の例(13)では、状況から考えて mbiが明らかに基準となる面に接触しない様な対象物を伴っている。これもまた現代ギリシア語の例(14)と対照されたい。

(13)*Fluturoi　　<u>mbi</u>　det　　/ qytet.*[6]
　fly-aor.sg.3 over　sea-sg.acc.indef.　city-sg.acc.indef.
(14)Πετούσε πάνω <u>από</u> την θάλασσα / πόλη.[7]
「（飛行機は）海／町<u>の上を</u>飛んでいた」

以上の例文から、現代ギリシア語の前置詞σεと　από が対象物と基準点との「接触」らしきものの有無によって使い分けられている（ στο τραπέζι では

対象物が『机の上面に接して、または内部に含まれて』存在し、(πάνω) από τραπέζι では『机から離れて上方に』存在する）のに対し、アルバニア語の前置詞nëと mbiは、接触の有無でなく、対象物に対する基準点（面）が、対象物そのものを外部に対して閉ざされたものにするか否かによって使い分けられる可能性を持っていると言える。こうしたnëを、次節で別の前置詞teと比較する。

2.「内部」のnëと「～のところに」のte

アルバニア語の前置詞teは「～のところに」という意味で、例(15)の様に用いられる。

(15)*Qëndrojnë* *te pregu* *i shkollës.*
stay-pl.3 threshold-sg.nom.def. school-sg.gen.def.
「彼らは校門のところにいる」

この場合、teの代わりにnëを用いた文は不自然な文になる。前節で述べた様に、nëは具体的な位置関係に於いてもっぱら対象物が「内部（inside）」にあることを示し、対象物を四方から包含・封鎖しない「門」の様なものには使えない。もちろん門は『遮断』の機能を持つが、門に対するそれ以上の意識（例えば、室内に閉じ込められている様な感覚）はない。もちろん基準となる場所が、人を収容する施設、建造物やその集合体であれば、例(16)の様にnëでも問題はない。[8]

(16)*Qëndrojnë* *në shkollë* */ universitet.*
stay-pl.3 school-sg.acc.indef. university-sg.acc.indef.
「彼らは学校／大学（の建物または敷地内）にいる」

例(15)の内容を現代ギリシア語で書けば、例(17)の様にσεを用いたものになる。

(17)Στέκονται *στην πόρτα του σχολείου.*
「彼らは校門のところに立っている」

先に見たnëの様な「内部」への封鎖が意識されない限り、アルバニア語ではteが用いられる。一方現代ギリシア語では、teに相当する新たな前置詞がある訳ではなく（現代ギリシア語に於ける単純前置詞の数そのものが少ないことは言うまでもない）、σεまたは複合前置詞（例えば κοντά の併用）によってこれを表す。

またteは、対象物として示された人物が所属している（或いは日常的に、所属すると考え得る）「場所」を示す。

(18)*Isha* *te miqtë.*

be-impf.sg.1 friend-pl.nom.def.

「私は友人達のところにいた」

（友人の家でも、その他の待ち合わせ場所でもよい）

(19)*Eja* *te gjyshja!*

come-imp.sg.2 grandmother-sg.nom.def.

「おばあちゃんのところにおいで」

（とにかく発話の時点で『おばあちゃん』がいるところ）

(20)*Vizitoj* *te mjeku.*[8]

visit-sg.1 doctor-sg.nom.def.

「私は医者のところ（病院、診療所など）を訪れる」

もしこれら３つの例文中にあるteを（特にσεとの連想で）nëに置き換えると、「体内にいる」とでも解釈せざるを得ない妙な内容になるだろう。つまり、施設などを基準とする(16)などの例では明瞭でなかった「内部」への封鎖、或いは内包というnëの概念が、人間を基準とする場合にはっきりと現れてくるのである。nëとteの用法は、（σε とαπόの様に）基準となる面に於ける対象物の接触の有無というよりも、空間領域に於ける対象物の内包の有無によって区別されていると考えられる。

3.「上方」の mbiと「垂直面」のnë

英語の前置詞onは、There is a book on the desk 「机の上に本がある」の様に水平な面の上に物体が存在している場合だけでなく、 There is a fly on the wall「蝿が壁にとまっている」の様に「垂直面」を基準として対象物が存在する場合にも用いられる。

1.で指摘した様に mbiは、基準点（面）が、対象物そのものを外部に対して開放している際に用いられる。それは一見したところでは英語のonに近い点があるのだが、それでは mbiはonの様な機能を完全に果たし得るのだろうか。

次の例(21)と(22)はいずれも「壁」や「黒板」という垂直の面に写真や地図をかけたり、字を書いたりする場面を表しているが、前置詞は mbiではない。

(21)*Në mur ka disa fotografi dhe*
wall-sg.acc.indef. have-sg.3 some photo-pl.acc.indef. and
një hartë.
one map-sg.acc.indef.
「壁には数枚の写真と1枚の地図がある」

(21')*Ngjitën disa fotografi dhe një hartë në mur.*
stick-aor.pl.3
「彼らは壁に数枚の写真と1枚の地図を貼った」

(22)*Mësuesi shkruan në tabelë*
teacher-sg.nom.def. write-aor.pl.3 board-sg.acc.indef.
me shkumës.
with chalk-sg.acc.indef.
「教師はチョークで黒板に書いた」

また次の例(23)の場合、「ノート」が「生徒」の前に広げられた水平な面であり得る（机にノートを広げて置いた場合など）にも関わらず、前置詞はmbiではない。

(23)*Nxënësit shkruajnë në fletore*
pupil-pl.nom.def. write-pl.3 notebook-sg.acc.indef.
me laps.
with pencil-sg.acc.indef.
「生徒達は鉛筆でノートに書く」

これらの場合、書き込むもの（例えば文字）や写真などが、ノートや黒板や壁といった面の中に内包されているという心理が作用している可能性がある。心理的判断によって対象物の存在する領域を「内部」と判断するこうした傾向は、既に例(16)にも見ることができるが、例えば(21)の場合、部屋の中に入ってきた人物が「写真」や「地図」を壁に含まれた「部分」として見ているとすれば、nëが選択されることも考えられよう。以上のことから、nëは必ずしも実際の「空間」における「内部」を指向するだけでなく、話し手の心理に於いて「内部」と判断される限りに於いても選択されることがあると言える。

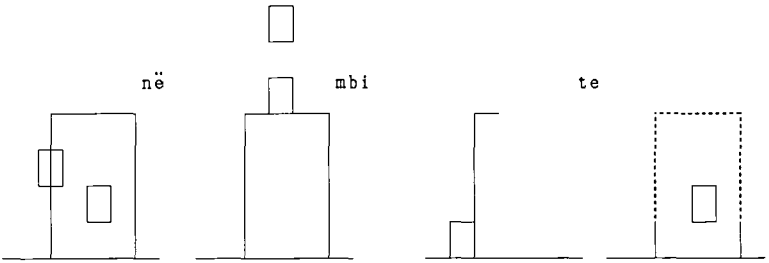
4.結論

1.に於けるσε/από とnë/mbiの対照からわかる様に、nëは対象物を基準とな

る領域の「内部」に包含する機能を持ち、一方 mbiは基準となる「面」の外側に対象物が存在することを表現する。ただしnëは、σεの用法に見られる様な対象物と基準の「接触」関係だけでなく、対象物が基準となる領域の「内部」に存在することをも要求する。この点で、nëが表す位置関係の制約性はσεのそれよりも強いと言える。

また mbiは απόの用法に見られる様な基準面からの非接触を必ずしも意味せず、基準面に接触して存在する対象物をも示すことができる。ただし、3.で見た様に mbiは単に面の外側ならどの方向でも含んでいる訳ではなく、あくまでも水平な基準面から垂直上方に存在する対象物の位置関係を示し、その他の面に接する（或いは一定の距離をとって存在する）対象物の位置関係については基本的にnëを用いる。

2.に於ける σε/απόとnë/teの対照の場合、例(15)や(17)に見られる様に、teは対象物が基準点に対して「隣接（接触する、或いは近くにある）」している場合だけでなく、対象物が基準となる空間の中にまで入り込んでいる場合をも表すことができる。ただし例(18)や(19)の内容から考えると、たとえその様な位置関係であっても、teを用いた表現には、対象物が内包されてしまうという意識がなく、「非内部」[10] とでも称すべき機能を持っている。現代ギリシア語のσεが持つ機能は、アルバニア語では「内部」性の有無を基準としてnëとteに区分されていると言える。



註

1)アルバニア語ではnëとほとんど同じ意味でmëという前置詞が用いられることがある。ただしその用法は慣用表現などに限定されていることが知られている（Dodi 1990）ので、本稿では特に問題としない。

2)以後、本文で用いる「場所」「着点」などの術語は、次に示す様な空間付接詞（spatial adjunct）の分類によるものである（岡田1985）。

a.場所（place）

b.経路（path）→1.限られた経路（bounded path）

→起点（source）／着点（goal）

2.方向（direction）

3.通過点（route）

3)例(02)と逆に「～から」を示す場合は ngaを用いる。

Erdha *nga Tirana.*

come-aor.sg.1

「私はTiranaから来た」（起点）

このnga は動作の「起点」の意味では *από*の用法に対応するとも言えるが、「上方」の位置関係を示す *από*の用法はむしろ mbiのそれに相当する。本文の例(13)及び(14)を参照のこと。なおこの ngaと、本文で扱うteは、共に主格をとる前置詞である（Përnaska 1991）。

4)nëが用いられても「机の中」とは限らない場合がある。例えば次の例の様にtryezëが漠然と「食事の場」を意味する時にもnëは用いられる。こうした例は慣用表現にしばしば見られる。

U ulën *në tryezë.*

set down-aor.med.pl.3 table-sg.acc.indef.

「彼らは食卓についた」

5)アルバニア語もギリシア語の様に複合前置詞を用いて、次の様に一層明確に「机の中」を示すことができる。

Libri është brenda në tryezë.

inside

「机の中に本がある」

ただしアルバニア語では、こうした複合前置詞句の副詞と前置詞との文法上の境界線が曖昧 (Buchholz & Fiedler 1987) で、副詞brendaのみを前置詞として用いる場合がある。この際、後続する名詞は奪格となるが、意味は全く同じである。

Libri është brenda tryezës.
desk-sg.abl.def.

6)これが別の乗り物であれば、(13)とは異なる解釈が可能になる。

Treni kalon mbi urë.
train-sg.nom.def. pass-sg.3 bridge-sg.acc.indef.
「列車が橋の上を通過する」

7)本文の例(14)を副詞πάνωなしで Πετούσε από την θάλασσα/πόλη.とすると、「海／町から飛んだ」という意味で、動作の「起点」を表す内容になる。アルバニア語で「起点」を示す場合は ngaを用いる (註3)の例参照)

8)こうしたnëとteの意味上の差違は、本文で考察対象としている「場所」の表示に於いては明確だが、移動の「着点」や「目標」を示す際には必ずしも明らかでない。例えば次の2例の様に移動を表す文で、しかも副詞deri「～まで」などを伴う時、その意味的差異はほとんど見られない。

Shkojnë deri në shkollë.
go-pl.3 school-sg.acc.indef.
Shkojnë deri te shkollë.
「彼らは学校（の方向）へ行く」

9)vizitojは直接目的語をとることもできるが、その場合は意味が異なる。

E vizitoj mjekun.
3sg.acc.visit-sg.1 doctor-sg.acc.def.
「私は（人物としての）医者を訪れる」（病院とは限らない）

現代ギリシア語επισκέπτομαι「訪れる」の用法は次の様になる。

επισκέπτομαι το γιατρό (ιατρείο).
「私は医者（診療所）を訪れる」

もっともこうした差異は「人物」を対象物とした場合のみであって、次の様な文では意味上の違いがないものと思われる。

Vizitoj *një spital* / *te spitali.*
visit-sg.1 one hospital-sg.acc.indef. hospital-sg.nom.def.
「私は病院を訪れる」

10) これは単なる「外部」の概念とは必ずしも一致しない。

しかし例(15)の様に明らかに「門の外側」にいることが考えられる場合には、「～の外に」の意味の前置詞jashtëを用いて書き換えても意味の相違はほとんどない。

Qëndrojnë *jashtë pregut* *të shkollës.*
stay-pl.3 threshold-sg.abl.def. school-sg.gen.def.
「彼らは校門の外側にいる」

参考文献

Buchholz, Oda & Fiedler, Wilfried(1987): *Albanische Grammatik.* (Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie)

Dodi, Anastas(1990): "A dallohen në përdorim parafjalët *më*, *në* me emra që tregojnë kohë, vend etj.": *Gjuha Jonë*, 3/1990, 82-84 (Tiranë, Akademia e Shkencave)

Fjalor i shqipes së sotme.(1984 Tiranë, Akademia e Shkencave e RPSSH. Instituti i Gjuhësisë dhe i Letërsisë)

Mackridge, Peter(1985): *The modern Greek language.*(Oxford, Oxford Univ.Press)

Përnaska, Remzi(1991): "Analizë struktore-semantike e togfjalëshave me parafjalën *nga* që sprechin marredhënie objektore": *Studime Filologjike*, 1/1991, 59-70 (Tiranë, Akademia e Shkencave)

岡田伸夫(1985):『副詞と挿入文』(大修館書店)

橘孝司(1994):「現代ギリシア語の前置詞と意味条件『領域』『絶対・相対定位』」『ニダバ』23, 64-73

Zu Funktionen der albanischen Präpositionen *në, mbi, te* im Vergleich mit dem Neugriechischen

IURA Ichiro

Die albanischen Präpositionen *në*, *mbi* und *te* werden für Ausdrücke räumlicher Beziehungen benutzt. Dieser Aufsatz handelt von dem Bedeutungsunterschied zwischen diesen Präpositionen im Vergleich mit den neugriechischen Präpositionen *σε* und *από* in Lokalbestimmung.

Die neugriechische Präposition *σε* gibt an, daß ein Körper (oder ein Mensch) mit einem Bereich irgendwo in Berührung bleibt. Andererseits kann das Albanische *në* nur innerhalb vom einem Bereich befindliche Körper anzeigen.

Das Albanische *mbi* wird benutzt, wenn ein Körper oberhalb einer Fläche existiert. Allerdings bezeichnet *mbi* nicht nur, daß der Körper oben über der Fläche ohne Berührung bleibt, wie das Neugriechische *από*, sondern auch, daß der Körper die Fläche berührt. Die Präpositionalgruppe mit *mbi* kann nur vertikal von der Fläche existierende Körper anzeigen, während für andere Richtungen grundsätzlich die andere Präposition *në* gebraucht wird.

Das Albanische *te* bezeichnet, daß ein Körper nahe bei einem Bereich ist. Manchmal bezeichnet *te* auch, daß der Körper innerhalb eines Bereiches existiert, aber trotzdem bedeutet das nicht, daß er darin eingeschlossen (enthalten) ist, wie bei *në*. Die Funktion des Neugriechischen *σε* in Lokalbestimmungen spaltet sich mit dem Kriterium "Innerlichkeit" in die Funktion von *në* und in die andere Funktion von *te* im Albanischen.